

『大学問』 来歴説考異

方 旭 東

(三沢 三知夫・訳)

〔キーワード〕：『大学問』 四句教 心体 晩年定論

〔概要〕：王陽明に関する文献において、これまで研究者は『大学問』を重く見、その資料価値は王陽明の全集を編纂した錢徳洪の『大学問』成立経緯の説明によって定まるところが大きい。本論では一つの系列に含まれる資料をもとに以下の事を明らかにした。錢徳洪の『大学問』成立の経緯の説明には矛盾点があること。『大学問』に反映している思想と王陽明が晩年に提出した「四句教」とは合致しないこと。『大学問』の出現と錢徳洪自身の思想の発展とは密接なつながりがあること。諸々の証拠により錢徳洪が提出した『大学問』成立の由来の説明は信頼に足るものではなく、『大学問』を王陽明の定論と見なすことはできないことを明らかにした。

〔作者〕：方旭東、1970年生まれ、安徽省懷寧の人。近年は「哲学研究」等の刊行物において中国哲学に関する論文数編を発表している。現在は北京大学哲学系の博士課程に在籍する。

王陽明（1472～1528）は明代理学において最も影響力を有する思想家であり、明代心学運動の代表的人物である。王陽明に関する文献において、これまで研究者が「大学問」（『王陽明全集』巻26「続編一」、967～973頁）を重く見ているのは、「大学問」を王陽明の晩年の思想における重要な資料と見なしているからである。^{〔1〕}「大学問」の資料価値は「王陽明全集」を編纂した錢徳洪の「大学問」成立の由来の説明によって定まるところが大きい。これまでこの錢徳洪の説明について疑問を呈した者はないが、本論では、錢徳洪の「大学問」成立の由来の説明は信すべきではないこと、「大学問」は王陽明の晩年の定論ではなく、「大学問」の資料価値は再検討すべきであるということを明らかにする。

「大学問」の成立の経緯について「全集」では次のように述べられている。

吾師接初見之士、必借学庸首章以指示聖学之全功、使知従入之路。師征思田、将発、先授大学問。徳洪受而録之。（『全集』巻26、967頁）

吾が師、初見の士に接するに、必ず「学」・「庸」の首章を借りて以て聖学の全功を指示し、従ひ入るの路を知らしむ。師、思・田を征し、将に發せんとするとき、先ず「大学問」を授く。徳洪受けて之を録す。

文中の「吾師」・「徳洪」という呼称よりみると、これは王陽明の弟子であり文集の編纂者でもある錢徳洪の手になるものであるということが明らかである。「師」とは王陽明を指し「征思田」とは嘉靖六年丁亥（152

7) 朝廷の命を受け、兩広に行き思恩・田州の反乱を平定しようとしたことを指す。王陽明が家郷の越中を出発したのは九月八日である。⁽²⁾先に引いた資料によれば、錢德洪が「大学問」を筆録したのは王陽明が越中を出発するより前の事である。具体的にはいつのことなのか。

【大学問】の跋には次のようにある。

徳洪曰、大学問、師門之教典也。学者初及門、必先以此意授。∴師常曰、吾此意思有能直下承当、只此修為、直造聖域。參之經典、無不吻合、不必求之多聞多識之中也。門人有請録成書者。曰、此須諸君口口相伝。若筆傳之於書、使人作一文字看過、無益矣。嘉靖丁亥八月、師起征思田、將発、門人復讀、師許之。(『全集』卷26、973頁)

徳洪曰く、大学問は師門の教典なり。学ぶ者初めて門に及ぶに、必ず先ず此の意を以て授く、と。∴師常に曰く、吾が此の意思、能く直下に承当する有れば、只だ此の修為、直ちに聖域に造る。之を經典に參ずれば、吻合せざる無く、必ずしも之を多聞多識の中に求めず、と。門人録し書を成さんと請ふ者有り。曰く、此れ諸君の口口相伝を須む。若し筆もて之を書に傳ふれば、人をして一の文字と作して看過せしめ、益無きなり、と。嘉靖丁亥八月、師起ちて思田を征し、將に發せんとするに、門人復た請ひ、師之を許す。

これによれば【大学問】は王門の「教典」であつて、講ぜられて久しいのであるが、長い問書物としてまとめられることは無かつたようである。【大学問】が筆録され文章として表されたのは嘉靖六年丁亥(1527)八月である。そうすると【大学問】が最初に刻版刊行されたのはいつなのだろうか。

【大学問】の跋では次のように説明されている。

是編鄒子謙之嘗附刻於大学古本、茲收録続編之首。(同上)

是の編は鄒子謙之の嘗て大学古本に附刻せしものにて、茲に続編の首に収録す。

このように、「大学問」が最も早く刻版されたのは、鄒謙之の『大学古本』に付刻された時である。では謙之はいつ『大学古本』を刻版したのか。

『東廓先生文集』(明嘉靖刻九卷本、二冊、北京図書館蔵)をみると、その原序には嘉靖戊戌の年(嘉靖十七年、1538)鄒の門生である林春が刻版したとある。よつてそこに収録されている文章を書いていたのは遅くとも嘉靖十七年までである。巻九の「雜著類」の「跋古本大学問」には次のようにある。

陽明先師、恐大学之失其傳也、既述古本以息群疑、復為問答以闡古本之蘊。

陽明先師、大学の其の傳の失ふを恐れ、既に古本を述べ以て群疑を息め、復た問答を為し以て古本の蘊を闡く。

又卷之七の「復毛古庵式之」には次のようにある。

近刻古本大学問、附以鄙見謹寄上求教。

近ごろ古本大学問を刻し、附するに鄙見を以てし謹しみて上に寄せ教を求む。

上に引いた資料によれば、錢徳洪が『文録続編』を編纂しその中に『大学問』を収録する前、鄒謙之がすでに『古本大学問』とよばれるものを刻版していたことが明らかとなる。問題は、鄒謙之のいう『古本大学問』が錢徳洪のいう『大学問』と同一のものであるか否かである。両者をつき合わせる前に、決断を下してしまうのは時期尚早というものであろう。しかし残念ながら、鄒謙之が刻版した『古本大学問』はすでになくなつて

いるため、実際に照合、調査することはできない。より細かくみていけば、鄒謙之の『文集』において二度言及されるのはすべて『古本大学問』であるが、『古本大学問』は一つの篇を成し単行されたものようである。錢徳洪の説明によれば「大学問」は「大学古本」に付刻されたものであるとすると単行されたものではないようであり、『古本大学問』と「大学問」が同一のものではないと疑うのは理由のないことではない。だが現在「古本大学問」を捜し出し、つき合わせる事ができず、鄒謙之の『文集』においても「古本大学問」が王陽明が思・田の反乱の鎮庄に向かう前のものであるということを証する関連資料もないことより鄒謙之の線から「大学問」の来歴問題を最終的に解決することを望むことはできない。我々は別の方法を探るべきである。

上に引いた資料より明らかになることは「大学問」と「大学古本」との関係は密接であるという一点に過ぎない。「大学問」は古本「大学」の解釈であるからには両者を並べるかたちで刻版するのはごく自然な事であり、「大学問」以外の「大学」に言及している王陽明の文章と一緒にするようなことさえ十分にあり得る⁽⁴⁾。よって我々はこの方面の資料に注意を向けていきたいと思う。

百陵学山本「大学古本傍釈」の王文祿の跋にいう。

嘉靖丁亥秋、先康毅君率渡江、扣陽明洞天、聞王龍溪先生講大学、得古本傍釈、止前序。后増四問答。祿今重梓、増答格物問標眉。

嘉靖丁亥（嘉靖六年、1527）秋、先、康毅君率めて江を渡り、陽明洞天を扣き、王龍溪先生の大学を講ずるを聞き、古本傍釈を得るも、止だ前序のみ。后四問答を増す。祿、今重梓し、答格物問の標眉を増す。

この王文祿の跋からは、次のことが明らかとなる。王文祿父子が嘉靖六年秋、陽明洞を訪れ、王龍溪の大学についての講義を聞き、⁽⁵⁾「古本大学傍釈」と前序を得た。そして「古本大学傍釈」はその後次々と増加され五条の問答を有するものとなった、と。陳来氏は王文祿の「跋」にいう「答格物問」とは「大学問」であるとする⁽⁶⁾。現在通行している「大学問」には全部で六条の問答を有しているが、「答格物問」はその中の第六条であるにすぎず、これを「大学問」の全編であるとされるのは妥当ではないだろう。王文祿が次々と増加したのもも五条の問答に過ぎず、「大学問」の全編ではない。よって王文祿が「大学古本傍釈」を刻版上梓した時は、まだ「大学問」の全体を見ていなかったといえる。このことは、「大学問」が嘉靖六年に成立したとするにせよ、その後長い間公開されず、すくなくとも王門外の者に至っては全く委細をうかがうことができなかった事を物語る。

そうすると、「大学問」は一体いつ公開されたのか、いつ現在通行の王陽明の文集の中に収録されたのか。この問いに答えるため、錢徳洪がどのように王陽明の文章を収集し、文録を編纂していったかを考察する。

王陽明没後、錢徳洪等は師の文集を編むため、何とかして遺文を搜集しようとした。嘉靖八年（1529）正月、錢徳洪は「⁽⁸⁾訃告同門」を書し、そこでは「明発、逾玉山、水陸兼程、以尋吾夫子遊魂、収其遺書」（明発し、玉山を逾え、水陸兼程して、以て吾が夫子の遊魂を尋ね、其の遺書を収めん）といい、又「⁽⁹⁾將遣人遍采夫子遺言及朋友私録以続成書」（將に人を遣わし遍く夫子の遺言及び朋友の私録を采り以て続けて書を成さん）という計画があることを明かしている。

『年譜附録』の「嘉靖十四年刻先生文録於姑蘇」の条には陽明の文書と思われるものを調査収集したり陽明

の言行を記録したものを等を集めたところがあるが、その後には次のようである。

先是、洪・畿奔師喪、過三山、檢収遺書。越六年、洪教授姑蘇、過金陵、与黄綰・聞人詮等議刻文錄。洪作駒遺文疏、遺諸生走江・浙・閩・広・直隸搜猎逸稿。至是年二月、鳩工成刻。〔全集〕卷36、133
1頁

是れより先、洪・畿、師の喪に奔り、三山を過り、遺書を檢収す。越ゆること六年、洪、姑蘇に教授し、金陵を過り、黄綰・聞人詮等と文錄を刻さんことを議す。洪「遺文を駒ふの疏」を作り、諸生をして江・浙・閩・広・直隸に走らし逸稿を搜猎せしむ。是の年二月に至り、工を鳩めて刻を成す。

これとはほ同じ記述が嘉靖十四年乙未（1535）正月の錢德洪の「刻文錄序説」にある。

戊子年（按：嘉靖七年、1528）冬、先生時在両江謝病帰、将下庾岭。德洪与王汝中聞之、乃自錢塘趨迎。至龍游聞訃、遂趨広信、訃告同門、約每三年遣人哀写遺言。明日又進貴溪、扶喪還玉山、至草萍駅、戒記書篋、故諸稿幸免散逸。自后同門各以所録見遺、既七年。壬辰、德洪居呉、始校定篇類。復為駒遺文疏、遣安成王生自閩・粵由洪都入岭表、抵蒼梧、取道荆・湘、還自金陵、又獲所未備、然后謀諸提学聞人邦正、入梓以行。文錄之有外集・別録、遵附録例也。〔全集〕卷41、1574頁

戊子の年の冬、先生時に両江に在るに病を謝し帰り、将に庾岭を下らんとす。德洪と王汝中と之を聞き、乃ち錢塘より趨き迎ふ。龍游に至りて訃を聞き、遂に広信に趨き、訃を同門に告げ、三年毎に人をして遺言を哀写せしむるを約す。明日又貴溪に進み、喪を扶して玉山に還り、草萍駅に至り、書篋に戒記し、故に諸稿幸ひに散逸を免る。后同門より各、録する所を以て遺さること、既に七年たり。壬辰、德洪呉に

居り、篇類を校定するを始む。復た「駒遺文疏」を為り、安成の王生をして閩・粵より洪都に由りて吟表に入り、蒼梧に抵りて、道を荆・湘に取り、還るは金陵よりし、又未だ備へざる所を獲しめ、然る后諸れを提学聞人邦正に謀り、入梓し以て行はる。文録の外集・別録有るは、附録の例に遵へばなり。

この資料とつきあわせて見るべきものとしては、黄綰の「陽明先生存稿序」(『石龍集』卷十三、「全集」卷41、1582、1583頁より転引)が挙げられよう。

∴其僅存者唯文録・伝習録・居夷集而已、其余或散亡及傳写訛錯。掩卷泣然、豈勝斯文之慨？及与欧陽崇一・錢洪甫・黄正之率一二子侄、檢梓而編訂之、曰陽明先生存稿。洪甫携之吳中、与黄勉之重為厘類、曰文録、曰別録、刻梓以行。(『全集』卷41、1583頁)

∴其の僅かに存する者は唯だ文録・伝習録・居夷集のみ、其の余或いは散亡し傳写するに及びて訛錯あり。卷を掩ひて泣然とし、豈に斯文の慨に勝へんや？欧陽崇一・錢洪甫・黄正之と一二の子侄を率いるに及びて、梓を検して之を編訂し、陽明先生存稿と曰ふ。洪甫之を吳中に携え、黄勉之と重ねて厘類を為し、文録と曰ひ、別録と曰ひ、刻梓し以て行はる。

これらの資料によれば、嘉靖十四年乙未(1535)、姑蘇において刻版された「陽明先生文録」⁽¹²⁾は、以前の陽明の文録の版本と比較するとより完備しているものであり、世に「姑蘇板」と称せられたものである。「姑蘇板」は「大学問」を収録しているだろうか。

実際「姑蘇板」は「大学問」を収録していないのだが、それは徐階の「陽明先生文録統編序」からもうかがうことができる。徐階の序には次のようにある。

余姚錢子洪甫既刻陽明先生文錄以伝、又求諸四方、得先生所著大学或問・五経臆説・序・記・書・疏等若干卷、題曰文錄統編、而屬嘉興守六安徐侯以正刻之。刻成、侯謀於洪甫及王子汝中、遣郡博張編、海寧諸生董啓予問序於階。(『全集』卷41、1572頁)

余姚の錢子洪甫既に「陽明先生文錄」を刻し以て伝へ、又諸れを四方に求め、先生著はす所の大学或問・五経臆説・序・記・書・疏等若干卷を得、題して文錄統編と曰ひて、嘉興の守六安徐侯に属し以て正に之を刻さんとす。刻成り、侯洪甫及び王子汝中に謀り、郡の博張をして編ぜしめ、海寧の諸生董啓予をして階に序を問はしむ。

「陽明先生文錄統編」は嘉靖四十五年(1566)に刻板(13)されている。そうすると「大学或問」(現行の「文錄統編」では「大学問」と改題されている)が陽明の文錄に収められ刻板されたのは嘉靖四十五年(1566)の事となる。

ここに至つて次のような疑問を持たざるを得ない。錢徳洪の言によれば、「大学問」が筆録され成立したのは嘉靖六年(1527)であり、鄒謙之も又嘉靖十七年(1538)以前に「古本大学問」と題した単行本を刻板している。錢徳洪等は陽明が没した後、全力を尽くして陽明の文章やその言行を記したものを捜査収集しているのであるが、嘉靖四十五年(1566)、「文錄統編」を刻板した時にようやく「大学問」を収録したのはなぜか。

もし本当に嘉靖六年八月に「大学問」が筆録されたとするならば、筆録者の錢徳洪が王陽明の「文集」を編集するにあたり、「大学問」を「師門の教典」たる文章と称えながら「文集」に収録しなかつた原因は、ごく普通

に考えると彼が「大学問」は他人に公開すべきではないと考えたこと以外にはあり得ない。実際、錢徳洪が王陽明の「文集」を編集した時、この篇は確かに収録されなかったのだが、一体どのような意図から「大学問」を公開しなかったのか。この問題については錢徳洪自身の見解がある。「大学問」の跋文で錢徳洪は次のようにいう。

録既就、(師)以書貽洪曰、大学或問数条、非不願共学之士尽聞斯義、顧恐藉寇兵而實盜粮、是以未欲輕出。

(『全集』巻26、973頁)

録既に就り、書を以て洪に貽りて曰く、大学或問の数条、共に学ぶの士尽く斯の義を聞くを願はざるには非ざれども、顧だ寇に兵を藉し盜に粮を賣らすを恐れ、是を以て未だ輕しく出だすを欲せず。

このように錢徳洪が「大学問」を押さえつけて発表しなかったのは、陽明の言いつけを守った為であつた。しかし細かく見ていくとここにみえる王陽明の配慮は矛盾をはらんでいる。1)「大学或問」数条は、十分、古本「大学」の正統性を信じさせるに足るものであり、人々の古本「大学」に対する疑いを解くものであつて、どうして人に口実を与えるようなものであろうか。2)これは陽明の言説と齟齬する。王陽明は積極的に古本「大学」に依拠すべきであると説き、「古本大学」を刊行しようとしたし、さらに「古本大学」について傍釈を試み、二度にわたり「古本大学」の序文を作っているが、どうしてこの傍釈と序文については「寇に兵を藉し盜に粮を賣らす」可能性が あることを心配せず、「大学或問」数条のみが「寇に兵を藉し盜に粮を賣らす」可能性があるとしたのか。

錢徳洪は王陽明からの親筆の手紙を証拠、切り札とするのだが、その点については疑いをもたずにはおられ

ない。この「與徳洪」という書簡は「文録統編」に収められているが（『全集』巻27、1014、1015頁）、
錢氏が「大学問」の跋文で引用するのはこの書簡の冒頭部分にすぎず、その後も文章が次のように続いている
のである。

且願諸公与海内同志口相授受、俟有風機之動、然后刻之未晚也。此意嘗与謙之面論、当能相悉也。江・広
両途、須至杭始決。若従西道、又得与謙之一話於金・焦之間。冗甚、不及写書、幸転致其略。

且つ諸公と海内の同志口もて相授受するを願ふも、風機の動有るを俟ちて、然る后之を刻むも未だ晩から
ざるなり。此の意嘗て謙之と面論せしも、当に能く相悉くすべきなり。江・広の両途、杭に至るを須ちて
始めて決せん。若し西道よりすれば、又謙之と金・焦の間に一話するを得ん。冗甚なれば、書を写するに
及ばず、幸ひに其の略を転致せられんことを。

ここでは鄒謙之に二度言及しているが、この書簡を通して、陽明は鄒謙之に自分の意を伝えることを依頼し
ているようである。⁽¹⁴⁾ 初めに論ぜられているのは「大学或問」を刻板印刷すべきか否か、その次は広西に赴くル
ートについてである。「至杭始決」とあるから、この書簡を書いたのはまだ杭州に到着していない時である。「年
譜」の「嘉靖六年」の条によれば、王陽明は九月壬午（初九日）越中を出発し、甲申（十一日）錢塘を渡り杭
城に到着した。又錢徳洪はこの書簡は「大学問」を筆録してから後のものであるとする。王陽明のこの書簡が
書かれたのは、嘉靖六年八月より九月十一日の間となる。錢徳洪は「大学問」を筆録した後、越中を離れるこ
とはなかった。だから王陽明は錢徳洪とあらゆることについて面談できたのにどうしてわざわざ書簡を送った
のだろうか、理解に苦しむのである。

嘉靖六年八月「大学問」が筆録され、その後王陽明が書簡を送り公開しないようにと依頼したことは、まさしく王陽明と錢德洪との間に生じたことであり、この間の消息について「全集」の他の部分では全く言及されず、「大学問」はいつの間にか錢德洪と王陽明兩人の秘密に属するものとなったのである。王陽明没後、錢德洪は何度も王陽明の文録を捜査収集、刊行したが、此の篇は収録せず公開しなかった。もし錢德洪が師の命を守り続けたとしたなら、嘉靖四十五年になってから「大学問」とその傍証たる「與德洪」とを共に「文録続編」に収めたのはいかなる意図によるものか。

「大学問」の跋文において錢德洪は次のように説いている。

師既没、音容日遠、吾党各以己見立說。學者稍見本体、即好為徑超頓悟之說、無復有省身克己之功。謂一見本体、超聖可以跂足、視師門誠意格物、為善去惡之旨、皆相鄙為第二義。簡略事為、言行無顧。甚者、蕩滅礼教、猶自以為得聖門最上乘。噫！亦已過矣。自便徑約、而不知已淪入弘氏寂滅之教、莫之覺也。古人立言、不過為學者示下學之功、而上達之機、待人自悟而有得、言語知解、非所及也。是篇鄒子謙之嘗刻於大学古本、茲収録続編之首。使學者開卷讀之、思吾師之教平易切實、而聖智神化之機固已跃然。不必更為別說、匪徒惑人、只以自誤無益也。（全集）卷26、973頁）

師既に没し、音容日、遠ざかるも、吾が党各、己が見を以て説を立つ。學者稍や本体を見れば、即ち好みて徑超頓悟の説を為し、復た省身克己の功有る無し。一たび本体を見、聖を超え以て足を跂すべしと謂ふは、師門の誠意格物、善を為し惡を去るの旨を視て、皆な相鄙みて第二義と為す。事為を簡略にし、言行顧みること無し。甚しきは、礼教を蕩滅し、猶ほ自ら以為らく聖門の最上乘を得たりと。噫！亦た已に過

てり。自ら径約を便として、已に仏氏寂滅の教に淪入するを知らず、之を覚る莫きなり。古人の立言、学者の為に下学の功を示すに過ぎずして、上達の機は、人の自ら悟りて得る有るを待つは、言語知解の及ぶ所に非ざればなり。是の篇は鄒子謙之の嘗て大学古本に刻せしものにて、茲に続編の首に収録す。学者をして巻を開きて之を読み、吾が師の教の平易切実にして、聖智神化の機固より已に跃然たるを思わしむ。必ずしも更に別説を為さず、徒らに人を惑はすに匪ず、只だ自ら誤るの益無きを以てなり。

このように錢徳洪が「大学問」を推し出し公開に踏み切ったのはおそらくそうせざるを得なかつた状況があつたのであり、それは同門において径超頓悟の説が優勢である傾向を正し、師門の誠意格物、善を為し悪を去るといふ教法に立ち帰るためであつた。

王陽明没後、王学は分化しつつあり、門人たちはそれぞれ異なる、自分自身の陽明思想についての理解に基づき説を唱え、そのうち本体を悟るといふ学説を唱えた王竜溪は門内において多くの批判を受けた。錢徳洪は明言していないが、批判の対象は竜溪の学である。ただ錢徳洪は王陽明の説で押し立てていく方法により竜溪の学を批判している。錢徳洪の批判に対して王竜溪も回答を示している。錢徳洪没後、王竜溪は「錢緒山行状」を著しているが、そこで天泉証道について回想、言及する際、自説にとつて有利になるような叙述をしている。⁽¹⁵⁾ また王竜溪没後、彼の弟子達は竜溪生前の口述及びこの「錢緒山行状」に依拠して「天泉証道記」(『王竜溪全集』第一卷)を作り上げ、竜溪の唱える「四無説」は陽明の「伝心之法」であり「師門之秘」と位置付けた。⁽¹⁷⁾ 錢徳洪は「大学問」が「師門教典」であるとし、一方王竜溪等は「四無説」が「師門之秘」であるとするのだが、その当否について結論を出すのは分析が為された後でなければならぬ。このような実証されなければならぬ

い観点と既に王陽明に属するものと実証されている観点についての資料を相互に比較することにより、判断を下すこととする。以降『大学問』を思想的に分析するとともに、『大学問』と『全集』中その他の文章とを比較し、問題を最終的に解決したいと思う。

『大学問』は対話体を採用し、一問一答を一条とし、あわせて六条である。以下、条ごとに検討していく。

第一条は「明明徳」を講じたものであり、第二条は「親民」を講じたものであり、両条の眼目とも万物一体の思想を説くことにあるから、第一条・第二条を併せて論ずることにする。万物一体の思想は嘉靖元年（1522）以後、越中に帰居していた時に作られた文章のうちによく現れている。たとえば嘉靖四年（1525）の「答顧東橋書」（『全集』巻二、50頁）、「重修山陰県学記」（『全集』巻七、257頁）、嘉靖五年（1526）の「答聶文蔚一」（『全集』巻二、79頁）等である。『年譜』「嘉靖三年」の条には次のようにある。

於是辟稽山書院、聚八邑彦士、身率講習以督之。∴先生臨之、只發大学万物同体之旨∴（『全集』巻35、1290頁）

是に於て稽山書院を辟き、八邑の彦士を聚め、身ら率ゐて講習し以て之を督す。∴先生之に臨むは、只だ大学の万物同体の旨を發くのみ∴

第三条は「止至善」を講じているが、大意のみならず文章も基本的に嘉靖四年（1525）の「親民堂記」の一節（『全集』巻七、251頁）と同じである。

第四条は「定靜安慮得」を講じているが、その眼目は「至善之在吾心、不假外求」にある。これは正徳七年（1512）王陽明が徐愛と『大学』の根本理念について語った時の内容に溯ることができ、つまり現行の『伝

習録上」の冒頭の数条の内容にほかならない。

第五条は「本末」を講じているが、本末が一にならなければならぬことを強調している。これは正徳十三年（1518）に作られた『大学古本傍釈』（『全集』巻32、1194頁）の「明德親民只是一事」という考え方と一致する。

第六条は「格致誠正修」を講じているが、これは功夫の問題であるが、おおよそ用という点からいえば功夫の筋道・順序はそのうちのいずれかを欠いたり乱したりしてはならない。また体という点からいえばその実は一なるものであるということである。第六条を概括すれば次のようになる。1）心の本体に不善はない。2）意念が発動した後不善が在るのである。3）誠意の工夫は致知のうちであり、致知は善悪を明らかにするための工夫である。4）致知の工夫は格物のうちであり、「格」とは善を為し悪を去ることであり、「物」とは実事である。文章は現行『伝習録下』の「先生曰先儒解格物」の条（『全集』巻三、119頁）に近い。「先生曰先儒解格物」の条は「以下黄以方録」という表示の後にあるが、黄以方ではなく錢徳洪が嘉靖三十五年（1556）に入録したものである。¹⁶よってこの条は比較の対象としては適当ではなく、参考に値せず、別のものを求めなければならない。

錢徳洪の言によれば、『大学問』は嘉靖六年（1527）八月、陽明が広州に赴く時に筆録されたものであり、そうすると『大学問』に反映しているのは当然嘉靖六年における陽明の思想ということになるが、もし陽明が明くる年軍旅のうちに没したということを考慮にいれれば、『大学問』を王陽明の晩年定論と位置付けるのは妥当であろう。

王陽明の晩年定論といえは、著名な天泉証道に言及しなければならぬ。天泉証道は王学において非常に重要な問題であり、これをめぐり、晩明から明清交替期にかけて多くの論争がなされた。⁽¹⁹⁾ある人(例えば劉宗周)はそれは虚構のものであるとするが、天泉証道は複数の者に記述されているだけではなく、当事者である錢徳洪と王竜溪が記述しているのだから現在、学会においても一様に虚構のものではないと見られている。錢徳洪というところの王陽明の『大学問』の口授と天泉証道とは同じ頃に行われたものであるから『大学問』・天泉証道とも王陽明の思想を体現しているという点でまさしく内容の上でも一致すべきものである。

天泉証道で王陽明は「四句教」を繰り返して述べ結びとしている。

(甲)【伝習録下】 (先生) 既而曰、以后与朋友講学、切不可失了我的宗旨。無善無悪是心之体、有善有悪是意之動、知善知悪是良知、為善為悪是格物。只依我這話頭随人指点、自没病痛。…(『全集』卷三、173-178頁)

(先生) 既にして曰く、以后朋友と学を講ずるに、切に我が宗旨を失(了)ふべからず。無善無悪は是れ心の体、有善有悪は是れ意の動、知善知悪は是れ良知、為善為悪は是れ格物。只だ我が這の話頭に依り、人に随ひて指点せば、自ら病痛没からん。…

(乙)【年譜】 先生曰、…二君以后与学者言、務要依我四句宗旨。無善無悪是心之体、有善有悪是意之動、知善知悪是良知、為善為悪是格物。以此自修、直躋聖位、以此接人、更無差失。(『全集』卷35、1306-1307頁)

先生曰く、…二君以后学者と言ふとき、務めて我が四句宗旨に依らんことを要む。無善無悪は是れ心の体、

有善有悪は是れ意の動、知善知悪は是れ良知、為善為悪は是れ格物。此れを以て自ら修むれば、直ちに聖位に躋り、此れを以て人に接すれば、更に差失無からん。

この二つの資料の出所は同一ではないが、「四句教」についての記述は一致しており、「四句教」を王陽明本人の説であるとみてよいだろう。もし「四句教」を先の『大学問』六条を概括した四点と比較すれば、首句を除く三句はほぼ同じ内容であるが、首句のみ異なる、つまり心体についての説が大きく異なるということがすぐに見てとれる。「四句教」では「無善無悪是心之体」といい、『大学問』では「心之本体無不善」（原文には「心之本体則性也、性無不善、則心之本体無不正也」（『全集』巻26、971頁）とある）という。このような差異をどのように理解すればよいのか。

まず確認しなければならないのは、このような差異を看過してはならないということである。王陽明の思想において「無善無悪」は心体を形容し、「至善無悪」は形体を形容しているとする先学の説がある⁽²¹⁾。しかしこの両句は明らかに心体について説いているのであり、語句の上では「心之本体」といったり「心之体」といったりしているが、その指し示す所は同一のものである。この両句は心体についてそれぞれ異なる定義を下しているものと考えざるをえない。

また理論的にこの両句が並行して衝突しないと証明するのは容易である。もし語意のレベルの分析を通してなら、至善とは心体が完全な聖性であることを示す根柢という点からいわれ、無善無悪とは個々の存在の向上の可能性を強調する点からいわれたものである⁽²²⁾。しかしつまるところ問題は次の点にある。実際、王陽明はこの両説を併せ説いたのか。天泉証道が実際にあったとするならこの問題に関連するような天泉証道におけるい

くつかの事実を明らかにしてみたい。

其の一、天泉証道の時、王陽明は諄々と錢・王を教え諭していたこと。「二君以后再不可更此四句宗旨、此四句中人上下無不接著。我年来立教亦更幾番、今始立此四句。」（『全集』卷35、1307頁）（二君以后再び此の四句宗旨を更ふべからず、此の四句は中人の上下接著せざる無し。我、年来教えを立てしより、亦た更ること幾番、今始めて此の四句を立つ。）王陽明の意図は明白である。四句教は彼が近年來始めて打ち立てたものであるが、王門の教法として位置付けられ、改変してはならないとされた。

其の二、天泉証道当日、錢徳洪は王竜溪との討論の時、王陽明の四句教を堅持し、心体については無善無悪説をとっていること。

（甲）『伝習録下』 徳洪曰、心体是天命之性、原は無善無悪的。但人有習心、意念上見有善悪在、格致誠正修、此正是復那性体功夫。（『全集』卷三、117頁）

徳洪曰く、心体は是れ天命の性にして、原と是れ無善無悪の的なり。但だ人は習心有り、意念上善悪有るを見（在）、格致誠正修、此れ正に是れ那の性体に復する功夫なり。

（乙）『年譜』 徳洪曰、心体原来無善無悪、今習染既久、覚心体上見有善悪在、為善去悪正是復那本体功夫。若見得本体如此、只說無功夫可用、恐只是見耳。（『全集』卷35、1306頁）

徳洪曰く、心体は原来無善無悪、今習染既に久しく、心体上善悪有るを見るを覚（在）え、善を為し悪を去るは正に是れ那の本体に復する功夫なり。若し本体を見得ること此くの如くなれば、只だ功夫の用ふべき無きを説くのみ、恐くは只だ是れ見のみ。

この二つの資料は大同小異ではあるが、心体の認識に関しては、すべて本来「無善無悪」と説いている。これはまさしくこの時期の錢徳洪の心体についての考え方——無善無悪論であって「大学問」の無不善論ではない——を反映しているのである。錢徳洪が嘉靖六年八月、陽明が発券する前に口授の「師門教典」である「大学問」を筆録したとするなら、一カ月ほどたった天泉証道の時、何故一語も言及しないのか。もしかすると王陽明が発券前に「大学問」を面授したというのは全くの虚構であって、すべては錢徳洪の作りごにすぎないという可能性も有り得るのである。

もしこのような見方が傍証を集めたものにはすぎないというのなら、次に正面から証拠を挙げてみよう。つまり「大学問」に反映している心体不善無しという考え方は、錢徳洪後期の心体の認識と正に符号するということである。錢徳洪は「大学問」の心体無不善説を堅持していたのだが、羅洪先（念庵）の錢徳洪の学説の変化についての概括を正面からの証拠として挙げる。

其始也、有見於為善去惡者、以為致良知。已而曰、良知者、無善無惡者也、吾安得執以為有而為之而又去之？已而又曰、吾惡夫言之者之淆也、無善無惡者見也、非良知也。吾惟即吾所知以為善者而行之、以為惡者而去之、此吾可能為者也。其不出於此者、非吾所得為也。又曰、向吾之言猶二也、非一也。夫子嘗有意矣、曰至善者心之本体、動而后有不善也。吾不能必其無不善、吾無動焉而已。彼所謂意者動也、非是之謂動、吾所謂動、動於動焉者也。吾惟無動、則在吾常一也。（黃宗羲『明儒学案』、中華書局、1985年、卷十一、浙中王門学案一、226頁）

其の始めなるや、善を為し惡を去る者を見る有りて、以て致良知と為す。已にして曰く、良知は、無善無

悪なる者なり、吾安んぞ執りて以て有と為して之を為し又之を去るを得んや、と。已にして又曰く、吾夫の之を言ふ者の清なるを悪む、無善無悪は見なり、良知に非ざるなり。吾惟だ吾が知る所に即きて以て善と為す者は之を行ひ、以て悪と為す者は之を去る、此れ吾が能く為すべき者なり。其の此を出でざる者は、吾の為すを得る所に非ざるなり、と。又曰く、向の吾の言猶ほ二のごときなり、一に非ざるなり。夫子嘗て意有りて曰く、至善は心の本体、動じて后不善有り。吾必ずしも其の不善無き能はず、吾動無きのみ。彼の謂ふ所の意とは動なり、是れを之れ動と謂ふには非ざるなり、吾の謂ふ所の動は、動に動く者なり。吾惟だ動無ければ、則ち吾に在りては常に一なり、と。

羅念庵は晩年錢徳洪と親密に交際しており、かつてともに王陽明の「年譜」を訂正したことがあり、学問においても相い許し合う関係にあった。⁽²³⁾ 羅氏の記述は信頼するに足る。羅氏の記述によれば錢徳洪の心体の認識は次に挙げる四つの段階を経てきたとする。1) 善を為し悪を去るを致良知とする。2) 良知は無善無悪である。3) 無善無悪は見であり、良知ではない。4) 至善は心の本体であり、動いた後に不善が在るのである。

これに対応する形で心体観においても無善無悪説から最後の至善無悪説へと変化していくのである。

錢徳洪が後(ほぼ嘉靖三十五年以後)無善無悪説から至善無悪説に転じたことは、まさしく「大学問」が嘉靖四十五年になってから収録された本当の原因を解く鍵といえるのである。つまり錢徳洪個人の認識の変化につれて、錢徳洪が信奉する教説は王陽明の同時期の思想とは異なるものとなったのであった。嘉靖六年錢徳洪は「四句教」を堅持していたのに数年後、転じて至善無悪説に賛成するようになる。錢徳洪個人のこのような思想の変化は王陽明の文録統篇の編纂過程によく現れている。まさに嘉靖四十五年、文録統篇を編纂し初めて

「大学問」を収録したとき、このような理由により説明を加え王門の教典と位置付けたのである。

以上、次のようにまとめることができる。現行の『王陽明全集』の『大学問』の来歴についての説明は、事よみても理よみても信ずるに足りない。『大学問』に反映している王陽明の思想は王陽明の晩年の定論ではないのである。

〔註〕

(1) 国内では、馮友蘭の『中国哲学史』下冊(1930)で王陽明について述べた一説では、まず『大学問』を用いて論を立て、「陽明の学説の主要なものはその『大学問』の内にあらわれている」(北京 中華書局、1992年版、949頁)とする。海外では、陳榮捷は「王陽明の『大学問』は疑い無く彼の哲学の中心である」(陳榮捷『中国哲学論集』台北 中央研究院中国文哲研究所、1994年版、95頁)という。

本論で用いるテキストは上海古籍出版社2003年版の『王陽明全集』(明隆慶六年刻三十八卷『王文成公全書』を底本とする)であり、以下すべてこれを引く場合は「全集」巻、頁数と示すのみとする。

(2) その後の「赴任謝恩遂陳肤見疏」(嘉靖六年十二月初一日)、「全集」巻14、462頁を参照。

(3) 巻首の序文によれば、嘉靖戊戌の年(嘉靖十七年、1538) 鄒の門生である林春が刻版したとある。また124篇の文章を収めている。『東廓先生文集』は他の版本がある。明隆慶六年(序1572)刻本(十二巻、十冊、北京大学図書館蔵)、清重刻本(十二巻巻首一卷、十冊、北京図書館蔵)等であるが、これらを比較すると嘉靖本が最も古いので本論ではこれをテキストとした。

(4) 王陽明は古本「大学」の正当性を信じており、久しく流行している朱熹の「大学章句」に反対し、当時においては新しいものを掲げ示し異を立てるものとみなされ、多くの人々から質問されたり非難されたりしたため、この問題については多くの文章をあらわし、また講じたりし、正徳十三年(1518)江西において古本「大学」を刻板し、あわせて「傍為之釈而引以叙」し(「年譜」「正徳十三年」の条、「全集」巻33、1253・1254頁を参照)、嘉靖二年(1523)又「古本大学序」を改定した(「年譜」「嘉靖二年」の条、「全集」巻35、1288頁を参照)。

(5) 陽明門下においては王竜溪・錢徳洪が王陽明に師事することが最も長く師門の旨を体得しているものとみなされ、陽明はこの兩人に入門したての者の講学を任せた。(「年譜」「嘉靖五年」の条「先生喜、凡初及門者、必令(徳洪与王畿)引導、俟志定有入、方請見」【全集】巻35、1300頁)。又陽明が両広に赴いてからは、家事はすべて魏廷豹に托し、書院の事はすべて錢・王の二人に任せている。「年譜」「嘉靖六年十一月」の条は徳洪・王畿の書を引き、「家事頼(魏)廷豹糾正」・「紹興書院…徳洪・汝中既任其責」とある(【全集】巻35、1309頁)。他に「与錢徳洪・王汝中(丁亥)」(【全集】巻六、233頁)を参照。王文祿父子がこの訪問で陽明の教えに接したとは言っていないのはこのためか。

(6) 陳来「有無之境―王陽明哲學的精神」、人民出版社1991年、第12章「付考」。

(7) この六条は次のような順番になっている。明明徳・親民・止至善・定靜安慮得・本末・格致誠正修。「格物」を詳細に解釈しているのは第六条。「全集」972頁を参照。

(8) 「年譜」の「嘉靖八年己丑正月」の条には「正月三日成喪於広信、訃告同門」・「初十日、過玉山」とある。

(9) 『全集』巻38、14444、14446頁を参照。

(10) この「陽明先生存稿序」はおそらく「陽明先生文録序」のことであろう。

(11) 錢德洪の「答論年譜書十首」の八による。「徐珊嘗爲師刻居夷集、蓋在癸未年（嘉靖二年、1523）」。

(12) 「年譜附録」の「嘉靖十四年乙未」の条によれば、「陽明先生文録」を刻板したのはこの年である（『全集』巻36、1331頁参照）。しかし鄒謙之の「陽明先生文録序」には「嘉靖丙申春三月」と署されているから（『東廓先生文集』巻二参照、現行の『全集』はこの文を収録しており、巻41、1568、1569頁にある）、文録が最後に刊行されたのは嘉靖十五年のはずである。別に日本九州大学文学部が所蔵する明の嘉靖十五年刊本「陽明先生文録五卷外集九卷別録十卷」は巻首に嘉靖十四年（1535）の黃綰の序・嘉靖十五年（1536）の鄒守益の序がある（周彦文著『日本九州大学文学部書庫明版図録』、台北、文史哲出版社。1996年版、232頁参照）。そうすると錢德洪が嘉靖十四年にまず文録の上梓を命じ、完成の後、鄒守益の序を求め、鄒守益が序を書いたのは次の年であり、「年譜附録」「嘉靖十四年」の条の記述は文録を刻板した時をいっているのであって、文録が最終的に刊行された時をいうのではない。故に通行本は嘉靖十五年の刊本なのである。

(13) 「年譜附録」「嘉靖四十五年」の条に拠る。『全集』巻36、1352、1353頁を参照。この条の内容はおおよそ次のようなことである。「師文録久刻於世。同志又以所遺見奇、彙録得卷者六。嘉興府知府徐必進見之曰、此於師門學術皆有関切、不可不遍行。同志董生啓予徵少師存齋公序、命工入梓、名曰文録統編、并家乘三卷行於世云。」

(14) 陳来氏は書簡の論調よりこれは「與鄒謙之」つまり鄒謙之にあてたものであると推測し、「陽明が江西に到着

した後、徳洪に与えた別の書簡があり、この書簡と語句が同じである〔有無之境〕362頁参照。筆者の分析によれば次のように解釈することができるのではないかと考える。王陽明は「冗甚」（多忙）のため鄒謙之宛の書簡を作成せず、錢徳洪宛の書簡だけを作成したのは錢徳洪と鄒謙之との間の意志の疎通を円滑にするためであった。（たとえば「大学或問」を刻板印刷するか否かについて、王陽明は鄒謙之と以前討論したことがあるから、錢徳洪に与えた書簡ではその点について多くは言及せず、詳細な点については鄒謙之に質すようにしているのである。）また、もし西に向かい江西に赴けば、王陽明は鄒謙之に会えるわけである。それ故、王陽明は鄒謙之に対しては書簡を作成せず、このような簡便な「與徳洪」だけを作成したのは「一書両用」であるといえる。

(15) 王学の分化状況について、黄宗羲は「明儒学案」で地域に基づいて数派に分類し、現代では思想の傾向によって分析を行うのが一般的であり、代表としては牟宗三「從陸象山到劉戡山」・陳来「有無之境」・楊国荣「心学之思」が挙げられる。

(16) 王竜溪のこの文章は、ある意味において彼の錢徳洪に対する「蓋棺論定」とみてよいだろう。この錢徳洪についての定論ともいえる文章において、王竜溪が「天泉証道」に言及しているのは意味深いものがあり、「大学問」に依拠することによって表明される錢徳洪の学説を事実上、否定しているのである。またこの点については次のように王竜溪を弁護することができるだろう。もし錢徳洪が偽作をつくったとしたら、王竜溪等はそれらの問題を暴き出すことをしないでおられようかと。

(17) 陳来「天泉証道記之史料価値」はこの点について綿密に考察している。『人文論叢』（1998年巻）171・178頁参照。

(18) 陳来氏は既にこの点について考察していて、疑問を感じておられるが、錢徳洪が「伝習録下」を編纂する際のミスとして処理されている。陳来「有無之境」376～379頁を参照。しかし筆者は問題はそれほど単純ではないと考える。

(19) この方面に関しては鄧艾民「朱熹王守仁哲学研究」、華東師範大学出版社1989年版、第五章「王守仁的四句教」、198～228頁を参照の事。

(20) 天泉証道は「全集」中、二か所において述べられている。一つは「伝習録下」、【全集】卷三、117～118頁。もう一つは「年譜」の「嘉靖六年」、【全集】卷35、1306～1307頁。【全集】以外では「天泉証道記」、

【王竜溪全集】卷一及び「青原贈所」、【鄒東廓文集】卷二。

(21) たとえば陳来氏の説、「有無之境」217頁参照。

(22) たとえば楊国榮氏の説、「心学之思」(北京 三聯書店、1997年) 238頁参照。

(23) 【全集】卷37所収の錢徳洪「陽明先生年譜序」及び「論年譜書」凡十首、羅洪先「陽明先生年譜考訂序」及び「論年譜書」凡九首等、【全集】1358～1379頁参照。

(北京大學哲学系編「哲学門」2(湖北教育出版社、2000年、第一卷第二冊)所収)